

欧州

カンボジア生まれ欧州育ちのエコバッグが超人気

軍隊からのお下がり毛布も秋冬用に再利用

2011.11.17 (木) 岩澤 里美 : プロフィール

SHARE BLOGS RESIZE PRINT

1 | 2 | 3 | 4 | NEXT PAGE >>

使 い古しのトラックの帆を材料にした「フライターグ」は、エコバッグの先駆者で表格。スイス・チューリヒのフライターグ兄弟が考案して爆発的人気を集め、今や世界中で販売されている。

10月には、アジア初の旗艦店も東京に開店した。ここ地元でも不動の人気だが、最近、スイスの街で、目を引く別のエコバッグを見かけるようになった。(文中敬称略)

ゴミだった魚の袋をリサイクル！

明るい黄色の魚柄のショッピングカートで買い物する女性、泳ぐかのように水色の地に魚が躍るメッセンジャーバッグを肩から下げる男性、ショッピングピンク色の魚柄のミニバッグを手にする子供。

このカラフルな魚柄バッグは、スイス西部ローザンヌに本社がある**コルパート**のエコバッグだ。「コルパート」というブランド名は、フランス語で「特別なコレクション」という言葉を略して作った。

フライターグの主要ラインはスポーティーな雰囲気強いが、コルパートはアクセサリ感をもし出して小粋だ。



魚の柄と色がお洒落な第1シリーズ「ローザンヌ=ブノンベン」は現在40種を超える。顧客たちからは「早く新しい種類を作って」と言われている

魚の柄はコルパートがデザインしたのではない。元々の素材に印刷されていた。この布は、カンボジアやベトナムで日常的に使われている魚を運ぶための袋だ。魚の柄がきれいに見えるように裁断している。

これらの袋はコルパートを設立したニナ・レバーが「すてきなデザインだ」と発見する前は、すべてゴミとして捨てられていた。

ニナがゴミだった袋を見たのは、8年前のこと。夫の仕事の都合でカンボジアに滞在していたときに見て、「これでバッグを作りたい」と思った。まず自分のために欲しいと思ったのだ。

自分で作ってみた試作品はととてもよくできた。それもそのはず、ニナは宝石デザイナー・職人として10年の経験があったから、デザインは得意中の得意だ。「こんなにすてきな、ほかの人たちもきっと欲しいはず」。ニナはバッグを売ってみようと思った。

初めのうちは、製作工程で文化の違いも

ニナは、カンボジアには利益優先で労働環境をないがしろにする企業が多数あることを知り、不遇な人々の支えになったら、自分はデザインを担当し、生産を、社会復帰を支援する地元のNGOに依頼することにした。

ただ、バッグ作りはすんなりと進んだわけではなかった。地元の人にとっては、ゴミを売るなどという発想は前代未聞で天地がひっくり返るようなもの。魚の柄も、住民には決して美しいとは感じられなかった。



「ローザンヌ=ブノンベン」は現在40種を超える。顧客たちからは「早く新しい種類を作って」と言われている

そのうえ、そのNGOでは絹製品を作っていたから、材質も大きさも違う魚の袋の扱い方もよく分からなかった。

「ゴミがなぜ売れるのかと、最初はみな半信半疑で作っていた。単にバッグの型通りに裁断すればいいのではなく、魚の柄がきれいにできるようにカッティングしないとイケないというの、なかなか分かってもらえなかった。魚の柄を2つに切ってしまうのも、しばしばだった。丁寧に縫うことも何度も伝えた」

ニナは、バッグ作りを始めた頃を思い出して苦笑いする。

ファンが増え、世界200店で販売中

ニナはいろいろな大きさのバッグだけでなく、リュックサック、ポーチ、帽子、財布など、アイテムの数を増やした。

スイスとカンボジアとで遠く離れていても、自分の町と生産者の町はつながっているという思いを込めて、この魚の袋シリーズを「ローザンヌ=ブノンペン」と名づけた。

パリのエシカルファッションショーなどで製品を披露し、地道なPRを続けたことが功を奏した。

スイス国内で注目を浴び始め、バッグを売りたいという店がヨーロッパのあちこちの国から出てきて、コルパートは、エコファッション最先端アイテムとして、スイスやフランスのファッション雑誌で頻繁に取り上げられるようになった。

2010年2月からは、日本でも販売が始まった（コルパート製品の日本販売総括元=ランパス）。

コルパートを取り扱う国はどんどん増えて16カ国に達し、いま200以上の店で売られている。



コルパートの設立者ニナ・レバーさん。同社を立ち上げる前はオリジナル宝石を作って売っていた

ローザンヌ=ブノンペンは現在40種類以上にもなるが、「早く新しい種類を作って」と愛用者たちから言われている。一番人気は発売当初から各種買い物バッグだというのが、1つ買うと次はラップトップケース、また次はウォールポケットと集めていくファンが多いそうだ。

大切なのは、生産者のことを考えること

ニナはアフリカの人々とも仕事をしている。第2シリーズの「ローザンヌ=ワガドゥグー」は、アフリカ西部ブルキナファソの首都ワガドゥグーの米袋やセメント袋を使ったバッグだ。

やはりニナがデザインし、生産は現地というスタイルだ。

生産地名を製品名にするこだわりを貫くのは、購入者たちに、バッグの背後にいる人々のことを考えてほしいからだ。

袋を集める、袋をバッグ製作場所へ運ぶ、袋を洗う、乾かす、裁断する、縫製する。1つのバッグには、実に様々な人たちが関わっている。

生産者たちの自立を支えていることにも気づいてほしい。「バッグ作りのおかげで、この間、新しい屋根が買えた！」とは、先日、電話越しに聞いたワガドゥグーの生産責任者のうれしそうな声。そんな小さな歩みを知ったニナの方も喜んだ。

今度は、スイス軍隊の毛布をリサイクル！

ニナは、この夏、第3弾目の「ローザンヌ=テルベル」を完成させ、国内業者向けの展示会で発表した。「ローザンヌ=テルベル」は秋冬向けバッグで、毛布が主材料。前面に2つの穴が開いていて奇妙だ。

ポケットにはファスナーがない。これは「手袋部」。ここに手を差し込むと毛布が温めてくれる。ニナがこんなバッグが必要だと思って誕生した。

ある凍えそうな日のこと。バスを待っていたニナは手袋を持っていなかった。バッグを肩に下げていて、ふと思った。



第2シリーズ「ローザンヌ=ワガドゥグー」は、アフリカ・ブルキナファソと提携している。バッグの素材は、現地の米袋やセメント袋



毛布が素材、手袋つきのデザインが奇抜で目を引く新作「ローザンヌ=テルベル」シリーズ。筆者も手にしてみたが、とても温かい。まずは国内14カ所で発売開始

「バッグにポケットをつけて、手を温めたらいいのでは。手袋だと落とすことがあるけれど、バッグが手袋にもなったら一石二鳥だ」

手袋のないバッグも作った。地図、菊、ハエの3種の柄で、「独特のバッグにしたかった」と言う二ナの言葉通り、バッグのモチーフとしてはあまり見かけない。

毛布は、もちろんリサイクル品だ。スイス軍隊で1960年代まで使っていた毛布で、寝袋を使っている現在、もはや不用になっている。

新作の生産パートナーは、南部のツェルマットの手前、標高1500メートルの小さな山村テルベルに位置するカーレンスイスだ。

同社はスイス軍隊の毛布を買い取り、この毛布で作ったスイス国旗デザインのバッグでよく知られている。十数人の従業員がすべて手作りしている。

地元の材料を地元でリサイクルする方針の二ナにとって、カーレンは最良だった。しかも、カーレンの技術は信頼が置けた。同社は高品質の品を作っている点で、2006年に、スイス山間部連盟（山間部の価値向上と発展を促進する団体）のSAB 賞を受賞している。

新作はチューリヒをはじめ、国内14カ所で販売を始めたばかりで、将来は日本でも発売できたらと期待している。



毛布バッグは手袋なしもある。ハエもモチーフにして独特さを強調した

リサイクルではなく、プラスアルファの「アップサイクル」

二ナは、コルパート製品は「アップサイクル」だと言う。日本でも最近少しずつ聞かれるようになっていくアップサイクルは、元の素材をアップグレードして価値を高めるという意味だ。

確かに丈夫で使い勝手もよく、デザインもお洒落なアップサイクル製品は、多少値が張っても買おうという人が増えている。

二ナは買う側の意識を変えただけではない。作る側の意識革命ももたらした。

特にブノンペンでは、作り手たちはゴミが生まれ変わるとはっきりと分かった。周辺にも波及して、今ブノンペンでは街を歩けばローザンヌ=ブノンペンを真似たアップサイクルバッグがあちこちで売られているという。

率直に言えば自分のアイデアがコピーされたわけだが、二ナは「今度はほかのアップサイクル製品を、カンボジアの人たち自身が考えだすかも」と、盗用など気にしない。

二ナはこれからも、アップサイクルのための素材を見つけ出し、個性的なバッグの数々を作っていくに違いない。



コルパートのオフィスは雰囲気のある建物内。以前は製鉄所だった（筆者撮影）



オフィス内にも製品をちりばめて。手前の緑色の植木カバーも「ローザンヌ=ブノンペン」